

二 シノンの行宮 あんぐう

假りのお宮をシノンの地に定めて居られた皇太子のシャルルは、お氣に入りの妃アニエ・ゾレエの愛を、此上もない隠れ家^がとしてその日くを送つて居られました。この方はまことに寛仁^{くわんじん}大度^{たいど}の君で、
ありましたが、煩^{たみ}はしい政務や、殊には民の血を流さなければならぬところの戦争を、殊の外嫌つて居られました。毎日のやうに

お催しになる酒宴は、亡び行く國のために傾ける盃であるやうなものでございました。御從弟のブルゴンデイ公が、敵の勢せいと合體せいはつたいされたといふことや、現在生みの母后ははぎみが、幼い英王を抱いて玉座ぎよくざにつかれたといふやうな注進を聞かたびに、譯もなく平和を好ませ給ふお胸は、苦しく絞られるのでした。いつそのことこの王位を棄すて、民を捨てゝしまふことが出来たならば、この苦しみや不安から遁のがれることが出来るであらうのにと、却て尊いおん身を厭いとはせられるのでございました。

さながら天下は泰平無事のやうに、謎語なぞ解きに浮身をやつしたり、がくじん樂人どもの音楽に聞き惚れたりして、日も夜もなく暮して居られる

シャルルも、さすがに酔ひのさめ際には、たとへやうもないもの侘びしさが感じられるのでございませう。荒れるがまゝに委まかした行宮あんぐうのお庭に、空高く雲が流れて居るのを、暫くはうつとりと眺めて居られましたが、やがてその心持ちをまぎらはさうとてか、傍らの武官を顧みて何かとお話しをなさるのでした。

『のうヅ・シャッテル、先刻朕ちんを限りなく楽しませた樂人がくじんどもに、それ〴〵黄金こがねの鎖を褒美にとらせい。』と譯もなく軽く仰言りながら、ヅ・シャッテルが首うなだれて黙つて居るのをご覧になり、『こりやヅ・シャッテル、何故お前は黙つて居るか？』

ヅ・シャッテルは恐るゝ首をあげて申しました。『陛下には、あ

まり事もなく御意ごいなさります故……。』

『黄金が無いと云ふのか。』

『はい、お金庫かなぐらにはもう一かけひとの黄金もござりませぬ。』

『なければ調達したらよいではないか。』

『と申しまして、贈物は愚か、明日を送るだけのことすら儘になりませぬ今の場合、お手許のお貯へも残らず使ひ果しましてござりますれば、兵士どもの俸給も支拂ふ道がなく、皆不平だら／＼で、ともすれば職を退のくとかやめるとか申して脅して居るのでござります。』

『皇室附の關税を抵當にして、ロンバルドの商人から金を借りたら

よいではないか。』

『その關稅も、この三年といふもの擔保たんぽとなつて居るのでござりまする。その土地も質物も、やがては人手に渡さねばならぬのでござりまする。』

『しかし朕は、その外に豊かな土地を持つて居るぞ。』

『左様ではござりますが、しかしそれもいつまでつゞく命でござりませうか。あゝ神の御意はどこにあるのでござりませう？　もしもオルレアンが敵の手に落ちましたならば、いよくこの國土は陛下のおん手を離れ、陛下には羊牧ひつじかひ同様のおん身とならせられるのでござりまする。』

『おゝ、それもよいであらうよ、尊い人間の血を流して、限り知られた領土を争はうよりは！　優しい小羊の眸にこそこの世の愛はあらう。あゝ愛こそ朕が住家であるのに！』

近習の人々は暫く言葉もなく、シャルルの嘆息の聲を聞いて居りました。蒲柳ほりうの御性質おんたちに戦争はあまりに強い刺戟であるとはいへ、自らおん身を見はなし給ふお心の弱々しさ、ノルマンディからはるくくと陛下を氣遣つて出向いて來た、慷慨家のデュノア伯爵は、先刻から劔けんの柄を握りしめて居りましたが、堪へかねたやうに進み出て、『陛下、私とても決して愛の力と尊さを否定するわけではござりませぬが、したがその愛とてもそれは相應ふさはしい贈物がなくては得

られぬものではないかと存じられます。愛を得るたゞ一つの道は、ひろくこなたの愛を示さるゝ義ぎではないかと、憚りながら存じられます、また「愛と提携し行くが武士らしき武士の行」と、さるものゝ本にござりました。陛下は今愛のために、人民の生命や財産のために、愛の領土のために、勇ましく戦はれねばならぬ時なのでござります。そして敵の血潮の中から、國土の名譽と、歴代繼承の王位を護らせ給ふ時こそ、陛下のおん額にミルデの葉の飾られる時なのでござりまする。』

この時一人の侍従はいえつがはいつて來て、『オルレアン市の市會議員が、拝謁を願ひ出ましてござりまする。』と申上げました。

シャルルの眉は曇つてみました。『彼等は救ひを求めに來たのであらう。朕は吾が身一つ助けかねる今であるのに！』

オルレアンの人々がその膝下しつか ひざまづに跪いた時に、シャルルはもの優しく仰せられました。

『おゝ、忠實なオルレアンの人々、市中ありさまの状況はどうであるか？日頃の勇氣をもつて、今も猶手硬い抵抗てじはを續けてゐるものと朕は思ふぞ！』

『陛下！ 困難は最早絶頂に達しましてござります。次第に土地はせばめられ、頼みとする砦は壞されて、一時一時に危険は迫つてまゐります。味方きずつの兵に傷かぬ者は一人もなく、そればかりでござ

いませうか、陛下、城中に兵糧は全く盡きましてござります。で、これまで指揮を執つて居りましたロジュピエール伯爵は、古い習慣に従つて、もしもこの十二日が間に、オルレアンを救ひの援軍が現はれなかつた^{とき}暁には、市民のために城門の鍵を下げて、敵に降伏いたしますやう^{ちか}盟はれましてござりまする。』

『おゝなんと短い期限ではある!』

『その期限の切れませぬうちに、何卒^{どうぞ}少しも早く援兵^{えんべい}をお送り下さりますやう、不肖の我々オルレアン市民を代表して、陛下の大御心^{おほみこころ}に嘆願いたしまする次第でござります。』

デュノア伯爵は居ても起つても居られぬやうに、劔の柄をつかん

でそこらをあちこちしてゐましたが、如何にも心外さうに議員達に向ひ、『サントライユも、不面目極ふめんもくきはまるその契約に同意されたか、どうぢやな。』

『さ、それでござります。武勇すぐれたあの方が生きてお出いでのうちは、誰一人そんな忌はしい降参のことなんどを口にはいたしませなんだが。』

『むゝ！ では彼は討死をしたか？』とデュノアは叫んでそこにつたちました。

『陛下のおんために、美事みごとな戦死を遂げられましてござります。』

『あゝ朕はまたサントライユをさへ失はねばならなかつたか！』

シャルルの失望はまた臣下しんかの失望でありました。人々は暫くは言葉がなかつた間に、一人の騎士はおづくとデュノア伯に囁きました。伯はいよく激してしまひました。

『えゝ重ねぐゝ忌々しい！ なんとといふ呪ひだ！』

『デュノア、何事ぢや？』

『ドオグラス伯から使がまゐりまして、スコットランドの傭兵どもが、俸給の残額を今日たつた今支拂はれなければ、城を開けて立退くと脅迫いたしますさうでござります。』

『あの朕が軍勢のうちで最も勝れたスコットランドの兵どもが？』

あゝ！ 禍ひといふ禍ひは皆朕に面を向け、勝れたものはみな朕に

背く^{そむ}と見える！　よしこの大地を打てばといつて、なんとして軍隊

の出ようがあらう！　この掌^{てのひら}に穀物の生えやうもあらうか。ずたず

たに朕が體を切れ！　朕が心を引き裂け！　黄金の代りにそれを

鑄^あよ！　あゝ朕がもつてをるものは血潮ばかりである！』

傾く武運に失望したシャルルが、もの狂ほしく見えました時に、

細かに急ぐ足音と爽かな衣擦^{きぬず}れの音が近づいて、寵妃^{ちようひ}のアニエ・ゾ

レエが、そこにその美しい目を落付きなさうに漂はしてゐました。

シャルルは甦^{よみがへ}つたやうに兩手をのべてそれを迎へました。

『おゝアニエ・ゾレエ、御身は朕を絶望から救はうとて來たか。御

身は今も朕のものである。朕が隠れ家は御身の胸である。御身がこ

の世にあらううちは、朕は何物をも失はぬと同様ぢやぞ！』

『陛下！』とアニエ・ゾレエは息を切つてヂュノアに向ひ、『もしヂュノア様今の事どもはあれはみんな眞實ほんとでございますか？』

『眞實どころの沙汰ではござりませぬ。』

そして支拂ふお金のないために、兵士だちは立退くのでございいますか？』

『全く、情けないながら！』

アニエ・ゾレエは、そのしなやかな片手を長くさしのべて、一つこばこの小筐を人々の前にさし出しました。『この中には黄金も寶石ほうせきもはひつて居ります。わたしの白銀しろがねを溶かして下さいませ。わたしの城

を賣つて下さいませ。プロヴンスの莊園を質にしてお金を借りて下さいませ。さうして何も彼もお金に代へて、スコットランドの軍隊を引きとめて下さいませ!』

こゝにも女性の誠心まごころの救ひがありました。

『どうぢやデユノア、なあツ・シヤツテル、このアニエ・ゾレエを持つて居る朕を、お前達は猶貧しいと言ふか？ あれがこれまで朕に所望したものといへば、冬の日咲いた花の類たぐひか、でなければ珍らしい果實であつたわ、だのに朕のためといへば、かうして何も彼かも捧げて朕を救つてくれる!』と、シヤルルは嬉しさうに打解けられるのでした。

『むだな飾りをどんなに棄てましたとて、わたしは少しもその日の
ことに事^{こと}缺^かきませぬ。差出がましいことかは知れませぬが、兵士の
ために宮殿の装飾^{かざり}を擲^{なげう}つて、陛下がお持ち遊ばすものを、みんな残
らず王位のためにお棄て遊ばしませ。そして陛下おん自ら馬を戦場
にお進め下さいませ、焼けるやうな太陽の光りに貴いお肌をさらさ
れて、空行く雲を屋根と遊ばします上^{かみ}を見ましたならば、どんなに
情^{こは}の硬い武士だといひましても、よく辛^{くる}苦^{しみ}の前に従順^{すなほ}となりますで
ございませう。』

『おゝアニエ・ゾレエよく言うた、朕は御身の愛によつて必と勝利
を得るであらうぞ。』

『いゝえ、それは陛下と、陛下の友の雄々しい太刀によつて得られるのでございます。』

僅かな光明が、シャルルをはじめ並居る人達の胸に宿りました。

懶怠らいだな心と、卑屈な驕慢心とを持つた人達の外は、たとひそれが一

時であつたにもせよ、シャルルが阻喪そさうした勇氣を復活させたのを喜

びました。けれどもそれもほんの僅かの間でございました。宮中に

は再び曇りの雲が垂れて、神の救ひの手が近づきつゝあるのを蔽う

てしまつたやうに見えました。

それは、御從弟おんいどこのブルゴンディ公と英軍との同盟に、ふとしたこ

とから隙が出来たのを耳にされたシャルルは、ブルゴンディ公と和

睦しようといふ考へから、使者をお遣はしになつて居られたのでしたが、今日しもその使者は、『陛下、最早や劔に訴へ遊ばすより外はござりませぬ。』と復命したのでございました。結ばない先に契約は破れました。オルレアンの戦場でお目にかゝらうと嘲笑つたブルボンデイの返答をもつて歸つて來た使者は、猶巴里パリの國會で、シャルルの王位を剥奪しようと決議したことを齎もたらしました。

哀れな佛王のシャルルは、思ひがけないこの悲しい知らせに落膽らくたんして、折角持ち直した氣をまた腐らせてしまひました。

オルレアンの議員等に向はせられて、『今卿達おんみたちの聞く通り、朕が運命はもう定まつたと見える。卿等おんみらは急いでオルレアンに歸つて、

忠實な市民に告げられよ、朕に對する卿等おんみらの義務を今こそ朕は解くゆゑ、卿等おんみらは今からして主なき自由の民である。一時も早く立ち歸つて、ブルゴンディ公の恩恵にすぎるやう、よく／＼協議をいたされよ。』と仰言つて、御自分自身をお見はなしなさるのでございました。

『なんと仰せられます。陛下にはあのオルレアンを捨てさせ給はうとな?』と氣早いデュノアがいきまけば、議員達ひざまづも跪いて代る代る弱いお心に縋すがらうとするのでございました。

『陛下、あまり御失望が遊ばされますな。陛下が冠の寶石同様、代々の君に對して最も忠實な、あのオルレアン市を、何卒情知らぬ英國どうぞ

人の支配の下にお委もとせ下まかさりますな。』

『あゝ我等は一度も戦はぬ先に負けねばならぬのでござりませうか。一滴も血を流さぬ先に、輕々しい流言るげんを信じて、佛蘭西の中堅たる大事な町を、むぎぐと敵の手に渡す御意みこころでござりまするか。』

『いやぐ、血は今までに十分流された。しかもそれがなんの益やくにたつたであらう？ 朕が軍勢は敗れ、議會は朕を彈劾し、生みの母さへ敵の幼兒を抱き、近親は朕を裏切ることに役だつたまでではなかつたか！ 神のみ意こころよ、み救ひよ、それは英國方におはすのであらう。アニエ・ゾレエよ、ロアアル河向ふに、朕は靜かな土地を探さうと思ふぞよ。御身が胸の愛を朕が隠れ家として！』

『いゝえ陛下、あまりに早く御失望なされて、國土におん背を向けられますのは、きつと神のみこゝろに叶ひませぬでございませう。陛下にはこの土に平和を植ゑ、佛蘭西國に中興の君とならせられなければならぬのでございます。』

『いや！ それは朕のよくするところではない。このやうに騒がしい御代を統^{みよ}べるには、もつとく勝^{すぐ}れて力ある腕を持たなければならぬのだ。朕は平和の國民を養ひ得ても、狂ひまはる民^{やはら}を和^やげるてだては知らぬのぢや。朕を憎^{うと}んで疎^そむ人の心を、劔^{つるぎ}をもつてなだめる力もないのだ！』

困難に支配されやすく、自分自身の力に信頼をもつことの出来ぬ

あとか

シヤルルは、恰も王國を失はんために生れて來た君のやうにも見え
ました。再びオルレアンの人達にむかはせられて、『今はもう力を持
たぬ朕が指揮を待たうとはすな、神は卿等おんみらを救はせ給ふであらう。』
とばかり仰言るのであります。

『あゝ！　どんなに長い嘆息をしたとてこの胸が納まらうか！
陛下、かうもやすく祖國を見棄て給ふ上は、弓矢の神も永久に陛
下を見棄て給ふであらう。陛下を王位に即かせ給ふも給はぬのも、
みんな陛下がみ心一つであるのに！』と、デュノア伯爵は胸を打つ
て嘆息するのでございました。

『陛下にはもはやオルレアンを見棄て給ふた。さあ使者の人達、予

が故郷のオルレアンにともぐ、歸らう！　そこには予にたゞ一つの道の討死があるのだ。陛下さらばでござりまする！』

[目次に戻る](#)

【入力者注】

底本は総ルビですが、入力者により一部のみ残してあります。

公開…令和三(2021)年八月十五日

改訂…令和五(2023)年三月七日